白鷗大学論集　第10巻 第2号（1996）183～218

論　文

我がスペイン語音研究を振り返って

原　　誠

目　　次

はじめに
1．振り出し
2．音素論
(1)　ドクター論文
(2)　教室での発音指導の産物
(3)　生成音韻論への反撥
(4)　音声学
(5)　100％構造主義への疑問
(6)　コセリウのnorma（言語慣用）批判
3．通時音韻論
4．方言学
5．ロマンス語学
6．啓蒙的なもの
7．いわゆる‘かぶせ音素’について
8．国際学会への挑戦
9．スペイン語学概論の初めの5項目と対照分析
10．結びに代えて

0．初めに

筆者は1956年3月の学部卒業直後の同年5月1日付けで東京外国語大学副手に採用された。最近ではこの副手のことを教務補佐と呼んでいるが，両者の間にはただ一つだけ大きな違いがある。すなわち後者は文字どおりの教務補佐であり，主たる仕事は教官の教材のコピーであるのに対し，前者の方はそういったいわゆる教務補佐の仕事の他に，副手自ら研究をおこなって，1年間の勤務の終わりに研究報告を庶務課に提出せねばならなかった。この週五日勤務の非常勤職を2年間務めたところで，運良く文部教官東京外国語大学助手のポストが空いて，そこへ筆者が納まった。これが1958年4月のことである。他大学の助手と違って，東京外国語大学の助手は週に3コマ授業を担当させられるのである。しかもよほどのヘマをやらない限り，専任講師，助教授，教授のコースをまっしぐらに辿れるシステムになっている。このような制度は，一部に批判はあるものの，筆者が青二才であった頃かられんめんと現今まで続いている。ただ一つ変わったことと言えば，かつての副手，現在の教務補佐から助手にはよほどの例外を除いてなれなくなったことであろう。考えてみれば当時は呑気な時代であったし，また筆者もつきについていたと言うことができよう。

このようにして筆者は1958年に東京外国語大学助手に採用されて以来，1996年3月めでたく定年退官するまで，なんと一つの大学で38年ものあいだスペイン語の教師を務めてきたことになる。これは，テニュアになるのがものすごく大変なアメリカの大学の教授連から見れば，まさに信じられないことであろう。筆者自身，自分が同一の大学に38年も居座ったことを実に恥ずかしく思っている。このことは筆者が無能であることを如実に物語っているからである。つまりもし筆者が有能であれば，とっくの昔にもっと高給で筆者を召し抱えてくれる私立大学からお迎えが来たであろうから。とこう書くと，筆者を38年間雇ってくれた東京外国語大学に対して失礼なような気がしてきた。この辺で話題を変えることにしよう。

筆者の父親は戦争中陸軍中佐であったために，敗戦後は追放令に引っかかっ

て民間の製薬会社に移ったが，「武士の商法」というのだろうか，まったく芽が出ず，しかも一家の生計を支えるべく身を粉にして働いたためであろう，健康を害してしまった。筆者が東京外国語大学スペイン語学科の4年生になった時の父親はこういう状態にあったのである。経済的に父親の収入に頼りきりであった母親は，卒業後の進路を決めかねている筆者に向かって，「お父さんがもうヨボヨボなんだから，あなたは早く就職して給料を家に入れてくれ」と言った。しかし偶然入学してしまった東京外国語大学スペイン語学科ですっかりスペイン語の魅力にとりつかれてしまい，我が愛するスペイン語の研究をしながら一生を過ごせたらいいなと思っていた筆者は思い切って自分の希望を父親に披瀝してみた。すると日本軍部がおっ始めた愚かなことこの上ない戦争のおかげで，自分の好きなことが何もできなかった父親は，今後の我が家の経済状況を恐らく気にかけてはいたのだろうが，息子には好きなことをやらせてやろうと思ったのであろう，「お前の好きなことをやったらいい」と言ってくれた。そこからも紆余曲折は数多くあるのだが，とにかく就職していった他の同級生とは違ったコースを選んで，副手に採用されたのである。このように動機が動機であっただけに，筆者の場合スペイン語の教師をつとめながらも，自分のスペイン語学の研究を絶対におろそかにするわけにはいかなかった。そして後述のような経緯で，筆者がこれまで公にしてきた 130点の論文のうち，約半分の52点の論文がスペイン語音に関するものとなってしまった。無能な筆者にしては何とか研究の方も形がついたということだろうか。もしそうだとすれば，さきほどの話に戻ってしまうが，大学での地位が安定していたからこそ無能な筆者でもこの程度できたのだと思いたい。1995年9月18日，大学審議会はその総会で大学教員の任期制を提言することを決めたと新聞が報じている。筆者の経験からすれば，任期制にはマイナス面の方が多いような気がする。再任のための実に下らない論文が量産される可能性が大であるから。

さてここで話が変わって，全国の若手のスペイン語学研究者が一堂に会しての SELEK（関西スペイン語学夏期セミナー）も1995年で第15回を数える

ことになった。毎回統一テーマが決められて，そのテーマについて10人前後の発表者が研究発表をおこなうのだが，95年は京都産業大学教授の三好　準之助氏の根回しが効いたせいであろう，これまで票数で決して１位を獲得することのなかった「スペイン語の音声と音韻」というテーマが１位となり，これに関連する研究発表がいくつもおこなわれた。さらにセミナー組織委員長の三好氏は，95年限りでセミナー出席を遠慮することを公言していた筆者に最後の花道を飾らせようとの意図の下にであろう，スペイン語音に関する講演を依頼された。そこで筆者の選んだ演題が本稿の標題であり，1995年７月20日（木）の夜京都府立ゼミナール・ハウスで筆者がおこなった講演をのちに文章化したのが本稿である。

１．振り出し

筆者のスペイン語音研究の振り出しは，何と言っても§０．で述べた副手時代の研究報告である。筆者の副手研究テーマは当時の主任教授であった笠井鎮夫先生が決めてくださった。すなわち「中南米のスペイン語」というのがそれである。学部の４年生の時，会田　由先生の卒論で「ペレス・ガルドスの初期の３小説」と題する，非常に出来の悪い卒業論文を仕上げた筆者は当時スペイン文学研究に自信を失っていたはずである。従ってこのような語学的な傾向をもった研究テーマには嬉々として飛びついたはずである。「はずである」で終わる文が二つ続いてしまったが，それは当時の記憶が定かでないからである。それにしても会田先生には申訳ないことをしてしまったとつくづく思う。筆者がスペイン語以外の科目にまったく興味を失い，スペイン語マニアになってしまったのは，３年生になって，現在の筆者から見れば当然その当時迷わず選ぶべきであった語学文学専修課程には見向きもせず，国際関係専修課程を選んだ直後のことであったと思われる。そう考えないと，当時なぜ筆者が国際関係専修課程に進んだかが説明できないからである。つまり§０．で引用した「一家の家計を支えてくれ」という母親の要請に抗えなかったのだろう。しかしそこで筆者の我儘な性格が顔を出す。スペイン語

マニアになってしまった筆者は4年生になった時，就職のことなど考えずに，会田先生の文学の卒論ゼミナールに殴り込みをかけてしまった。当時の筆者の態度をかばうわけでは決してないのだが，これには止むを得ない面もあったのである。つまりスペイン語学科の中でスペイン語に関する卒業論文を書こうと思ったら会田先生の文学の卒論ゼミしか開設されていなかったのである。この筆者の殴り込みに対しては，当然のことながら，会田先生は拒否の態度をお取りになった。スペイン語学科の学生で国際関係専修課程に進む者のことを，「どうせあいつは商人になるんだから」とおっしゃって軽蔑しておられたからである。しかし筆者があまりにしつこく押しかけ女房的にお願いするものだから，ついに最後は先生の方が根負けされて，卒論執筆をお認めくださった。やっとお認めいただいたのだから，テーマぐらい自分で決めればよさそうなものなのに，テーマまで先生に決めていただこうというのだからその図々しさたるや筆舌に尽しがたいものがある。それでも先生は，心中は渋々であったろうが，表面は嫌な顔一つなさらず，筆者を学生の入れない図書館の書庫に連れていってペレス・ガルドスの「ドーニャ・ペルフェクタ」を選んでくださった。「グローリア」は先生のお手持ちのを頂戴した。「レオン・ロッチの一家」はやはり図書館のを借りたのではなかったろうか。こんなにお世話になった会田先生に対し，スペイン語でではあったがヘンな卒業論文を提出してしまった。先生がご存命であれば，お詫びすべきことは数々あるが，何はともあれお詫びせねばならないのはこのことである。

かようなわけで，筆者の専門は消去法的にスペイン語学に定まったのである。スペイン文学の研究が消去される前に，まずスペイン語圏の地域研究が消去されてしまっていた。筆者は未だにこの偏見から脱しえないのであるが，地域研究というものには何かしらディシプリンが欠けているような気がしてならないのである。筆者はディシプリンがしっかりしていないものはすべて大嫌いである。そこへ行くと，スペイン語学は結局は言語学に遡り，この言語学にはしっかりとしたディシプリンがととのっている。

さていよいよ中南米のスペイン語を研究するに当たって，日本で大学院に

入学しなかった悲しさ，どんな文献から読み始めたらよいのか皆目検討がつかない。仕方なく当時助教授であった宮城　昇先生にうかがったところ，Lapesa, R. 1995. Historia de la lengua española [3]. Madrid : Escelicer. を推薦してくださった。これはスペイン語史を扱った書物であるが，そのp. 342から巻末までは「第17章中南米のスペイン語」と題されている。スペイン語史は俗ラテン語からスペイン語への変化を辿るのであるから，その間1492年のクリストバル・コロンによるアメリカ大陸との出会い以降同大陸にもたらされたスペイン語の動向について取り上げるのは当然のことである。何はともあれ筆者はラペーサの書物の第17章を読み始めた。そこではまず先住民語が与えたであろうスペイン語への影響が取り上げられていた。スペイン語への先住民語の影響となると，必ず話題にされるのがRodolfo　Lenzが唱えたチリのスペイン語への先住民語であるアラウコ語，またの名をマプーチェ語の影響である。そこでは主にスペイン語の音声に対するアラウコ語の音声の影響が論じられていた。筆者がスペイン語の音声の研究に興味を抱いたそもそもの発端は，今から振り返ってみると，レンスのアラウコ語基層言語説にあったように思う。しかしこのレンスの説は，Alonso, Amado. 1953. Estudios lingüísticos－Temas hispanoamericanos. Madrid : Gredos. の中に収められているExamen de la teoría indigenista de Rodolfo Lenzという論文によって完全に論破されてしまった。つまりレンスがアラウコ語の影響だとしたチリのスペイン語の音現象はすべてスペイン語の方言に聴かれた音現象だったのである。筆者はここまでで三つの文献を読んだことになるが，あとの二つの文献はラペーサの書物の p.346にある脚注によってその存在を知ったものであり，このことから学問的にまったく無知であった筆者が得た教訓は，とにかく何か一つの文献に眼を通すこと，そうすればあとは芋蔓式に関係文献を見つけ出すことができる　ということである。かくして学問の怖さをまったく知らない当時の筆者は，上記わずか三つの文献を読んだだけで，日本イスパニヤ学会の機関誌「イスパニカ」に，本稿末尾の「原　スペイン語音関係論文一覧表」の3.を投稿して幸いにも採択された。今は

もうこの論文を手にするだけでゾッとするほどの不出来な習作であるが，反面では筆者は色々な関係論文を読み，色々な説に触れてそれらを適正な順序で並べて紹介する，そしてもし可能ならば，たとえ短いものであろうと筆者のコメントを付け加える，たったそれだけの論文とは言えないような論文をいくばくかのはじらいとともに書いているうちに，じわじわと筆者の個性らしきものが出てきたように思う。「一覧表」の5.，8.，14．あたりまではそういったたぐいの，他人の論文の精読から結果する紹介に過ぎず，筆者のオリジナリティーは皆無に等しい。少し筆者らしさが出てきたのは 18.あたりからであろうか。

18．の前半は，8.で紹介したA．Alonso の，yeísmoの発生はスペインよりも中南米の方が早いという説をくつがえすGalmés de Fuentes の説を紹介することに充てられているが，その後半はGuitarteの，中南米のスペイン語の/θ/を欠いた子音体系を，スペインのスペイン語との比較において構造主義的に解釈しようとする試みを紹介・批判している。その筆者による批判をここで手短かに述べるには，1960年代の初頭に筆者がどんな文献を読んでいたかについて語らねばならない。後述のように，筆者は1962年７月スペイン留学に赴く直前まで，佐藤　純一東京大学名誉教授・創価大学教授と一緒に，Martinet，A．1962．A．functional view of language．Oxford：The Clarendon　Pressを読んでいた。否，この表現は適当ではない。佐藤氏にMartinetを読んでいただいていたというのが適当である。この書はのちになって，マルティネ，アンドレ；田中　春美　&　倉又　浩一共訳．1975．言語機能論．東京：みすず書房．という邦訳が出た。この邦訳の pp．3－4でマルティネは次のようなことを述べている。

“「構造主義」に対する最も根深い反対は，実際には，どんな「構造」でもそれ一本槍になれば，必然的な結果として，学者は観察可能な事実を綿密に吟味することをしなくなり，また理論構成を急ぐあまり，自分たちの企ての邪魔になるものはすべて無視するようになる，ということである。”

それまで構造主義に多大な期待を抱いていた筆者はこのマルティネの名言

を読んでそれこそ頭から冷水を浴びせかけられたような思いを味わった。それ以後の筆者は構造主義万能の考えを改めて，他に割り切れにくい部分をも認める柔軟な構造主義者に変貌したつもりである。このような考え方の変化に基づいて，スペイン語の子音体系には，とくにその硬口蓋音序列において，ラテン語に硬口蓋音が一つもなかったことが主たる原因で著しい揺れが感じられる。つまりこの揺れの事実が物語ることは，20世紀末において中南米のスペイン語の子音体系は整然とはしていないということである。しかしそれでもいいではないかという考えを筆者は抱くようになったのである。体系内のどこかに歪があって，それを是正しようとする無意識の力がはたらくという構造主義的信念は決して捨てることはない。しかし20世紀末の現在，その歪の是正が終わっていなければならないとは考えたくない。ただ今後中南米のスペイン語の子音体系が何らかの形でより整然とした方向に向かっていくであろうというオプティミスティックな信念だけはどうしても捨てたくないのである。人間は，ある歪が是正された暁に，また別の部分に別の歪が生じることまで予測してある歪を是正しようとするわけではないから，歪は体系のどこかに常に存在するということになる。

さて筆者は三つ前のパラグラフの末尾で，「少し筆者らしさが出てきたのは 18.あたりからであろうか」と書いたが，この「中南米のスペイン語」シリーズは18のあと，24，29，45，53，79，80，84，89と（その14）まで続くのであるが，29と53を除くとあとは全部例の筆者の「たるみと張り説」を扱っており，これについては§4.の「方言学」の部分で取り上げることにする。

なお，3，5，8，14，24，45，79，80，84，89 の11点の論文はのちに近代文藝社のお申し出と，スペイン文化省のグラシアン基金のご援助とにより，原　誠．1995．中南米のスペイン語．東京：近代文藝社．として１冊の書物になった。絶対に売れないと分かり切っているのに本書を出版してくれた近代文藝社のご好意と，同書の出版に経済的援助をしてくれたスペイン文化省にはいくら感謝しても感謝し切れるものではない。これでほんの少しは笠井鎮夫先生への恩返しができたことになるかもしれない。

2．音素論

1956年5月スペイン語学について西も東も分からないまま筆者は東京外国語大学副手になった。笠井　鎮夫先生が「中南米スペイン語」という研究テーマを決めてくださった時点で筆者の専攻分野はスペイン語学と定まってしまった。このことをお知りになった，筆者の拙い卒業論文の指導教官会田由先生は「笠井さん，いい研究テーマを決めてくれたな」とおっしゃったあとで，「原，お前スペイン語学を専攻するんだったら，英米語学科の佐々木達の授業とフランス語学科の家島　光一郎の授業に出ろ」とおっしゃった。その他にも同先生のすすめによって，同先生のRuiz de Alarcón のVerdad sospechosa の講読や，鈴木　健郎先生のシャルル・ルイ・フィリップの短編集の講読にも出席させてもらった。今となってみると，これらの講読の授業に出たことが筆者の血となり，肉となって，大いに役立った。このことから筆者が得た教訓は「一見役に立ちそうもないことを，のちになって何が役に立つか分からないから，回り道とか道草とかと思ってもよいから，やっておくものだ。のちになって役に立ったことというのは，当初は役に立ちそうには見えない」ということである。それにしても会田先生は直接・間接にずいぶん色々なことを教えてくださったものだと思う。少し大げさに言うならば，筆者が今日あるのはすべて会田先生のおかげである。先生の家庭の事情は大変複雑で，それをまぎらわすべくよくお酒を召し上がったが，相当出来上がっておられる時でも「原，あいつがドン・キホーテを訳しているなら，このおれがやってやるという精神を忘れるな」とよく繰返しておられた。しかもこの言をちゃんと実行なさったのだから大したものである。すなわち先生は日本で最初のドン・キホーテの完訳者となられたのである。しかも英訳からの邦訳などというものではなく，スペイン語からの直接の和訳である。今になって考えてみると，「あいつがやっているなら，…」という先生のお言葉は実は学問の基本であったのだ。学問とは既成の権威に疑問を抱き，反撥し，それを乗り越えて自分独自のものを樹立することである。従って学問をする人はあまり善人にならない方がよいと思うのだがどうであろうか。さ

らに会田先生は各出版社でドン・キホーテの先生による訳本が出るたびごとに筆者に恵贈してくださったが，それには必ず献辞がついていた。そのスペイン語による献辞を和訳すると，「原よ，私を追い抜け」という意味である。これまた先生の名言である。つまり弟子には学問的に恩師を追い抜く義務があるというのがこの献辞の意味である。筆者には会田先生を学問的に追い抜く義務があったのだが，果して筆者は先生を追い抜けたのであろうか。

本題から外れて，会田先生への賛辞に紙数を費してしまったが，その会田先生がすすめてくださった佐々木先生の英語学特殊講義の授業にこっそり出席して，驚いたのなんのって。専門学校から新制大学に昇格した東京外語大学にも，このように素晴らしい，大学教授が居られたのかとすっかり感激してしまった。つまり佐々木先生は，無知な筆者がそれまで英語学の神様とまで崇めていたデンマークのOtto Jespersenを対等の立場に立って批判なさったのである。当時先生はこのJespersen のthree ranks 説と，アメリカ構造言語学のFries のfunction word の概念とを取り入れた独自の英文法を我々に教えてくださった。この先生の独創性にすっかり感動してしまった筆者は，佐々木先生に倣って筆者独自のスペイン語文法をぶっ立ててやろうという気を起こした。これがのちのスペイン語創出文法理論となって結実するのだが，筆者自身は同理論をどのように評価したらよいのか分からない。とにかく佐々木先生には大変啓発された。先生が定年退官されたのちも，東　信行氏と一緒に，あるいは単身で練馬区豊玉中のお宅にうかがってお話をうかがったものである。先生のお話の中で今でもはっきりと覚えているのは，文法理論は生成文法のようなgenetic な理論と，アメリカ構造主義言語学のようなstatic？あるいはdescriptive ？な理論とが交替して現れるものだとおっしゃったことで，「先生は定年になられても全然ボケておられない」と感心したものである。さて筆者独自のスペイン語文法をぶっ立てようと決心したその手初めに，Jespersen の MEG全７巻を読破すればよかったのだろうが，筆者は愚かにもFries, Charles C. 1952. The structure of English. New York : Harcourt, Brace & Co.から読み始めてしまった。そしてその中に出て来る

function word（機能語）の考えをスペイン語の再帰代名詞に適用して，1957年10月に大阪外国語大学で開催された第3回日本イスパニヤ語学会で口頭発表した。それがのちに文章化されて，原　誠．1959．スペイン語再帰動詞の諸用法の再検討．「東京外国語大学論集」7．15 －38．となったのであるが，それ以後筆者はスペイン語文法に関する論文を書くのをぷっつりやめてしまった。その理由を以下に掲げることにする。その理由には実に四つあるのだが，中でも第1の理由が他の三つの理由を圧倒して断然大きい。

言語学の徳永　康元先生と筆者との関係は実は言語学を通じてというよりもむしろ音楽を通じてのものであった。ひょっとするとあの頃3度の飯はおろか，スペイン語学よりも好きであった音楽，中でもバルトークは大好きであった。他方徳永先生はバルトークがナチに追われてハンガリーをあとにする直前の，国内での最後の演奏会を聴いておられる。そこで筆者は副手としての勤務の合間を縫って先生の研究室にお邪魔し，よくバルトークのお話をうかがったものである。ちょうどその頃のことであったろうか，いまどんな研究をしているのかという先生のご質問に対して，筆者は得々としてFries，1952にヒントを得てスペイン語のsyntaxの研究をしているとか何とか馬鹿なお答をしたに違いない。この時，日頃温厚な徳永先生，一言ズバッと「それはまずい。原君，音からおやりなさい。」とおっしゃった。この先生のご一言は筆者には実に良く効いた。それは筆者がスペイン語学にも言語学にも全く自信がなかったので，砂漠が水をいくらでも吸い込むように，お偉い先生方のアドヴァイスをどしどし受け入れられたからだと思う。かくして筆者はいつの頃だったか忘れたが，40歳になるまでは音の研究に従事しようと決心したのである。この決心は忠実に履行された。それが証拠に，筆者が満40歳を迎えたのは1973年であるが，それまでは音に関する研究ばかりが発表されており，やっとsyntaxに関する研究が現れたのは1975年のこと，その論文は原　誠．1975．スペイン語に主語はあるか？「イスパニカ」19．85－97．というものである。このように筆者が40歳になるまで音の研究に従事したこと，今となって毫も悔いるところはない。本当によかったと思っている。

その意味で徳永先生にはいくら感謝しても感謝し切れるものではないと思う。先生はとくにTrubetzkoy, N. S. 1939. Grundzüge der Phonologie. TCLP Vol. 7. Prague. を読むことをおすすめになった。しかし恥かしながら，ドイツ語の得意でない筆者は仕方なくJ. Cantineauによる仏訳Principes de phonologie. Paris：Klincksieckに頼らざるをえなかった。この仏語訳を筆者は1959年10月21日に神田駿河台の三省堂書店で購入したと記しているが，読了したのは1960年２月29日と書かれている。現今では長嶋　善郎による和訳書が岩波書店から出ているから，最近の人々はこの本が日本語で読めて幸せである。筆者は仏語訳を４か月かけてフーフー言いながら読了したが，おそらくその半分も理解できなかったであろう。それでも今顧みると，実に構造主義的なoppositionの概念などは鮮烈な印象となって筆者の脳裏に刻み込まれたようである。この書物もまたのちになって筆者にとり大変役に立ったと自信をもって言うことができる。

このようにして筆者は徳永先生の謦咳に接するようになったのだが，これはとりもなおさず徳永Schuleに接することを意味した。この徳永Schuleの中には矢島　文夫，佐藤　純一，千野　栄一，倉又　浩一，田中　春美，森安達也といった方々が属しておられ，毎年正月には神田一ツ橋の学士会館に部屋を借りて新年の顔見せが行われていたし，またいつぞやは五日市方面へのハイキングに誘われて参加した記憶がある。このグループの中の佐藤氏と田中氏とが，別々にではあったが筆者と一緒に言語学の文献を読んでくださったことが，筆者が音の研究にのめり込んだ第２の理由を形成している。日本で大学院の授業を受けることができなかった筆者にとって，この読書会こそそれに代わるものであり，その意味で真の意味での筆者の言語学の先生は佐藤・田中両氏であり，これまたお二人にはどんなに感謝しても感謝し切れるものではない。まず佐藤氏が筆者と一緒に読んでくださった文献は，最初がJoos, M.(ed.). 1958. Readings in linguistics 1. Ann Arbor：American Council of Learned Societies., そしてその次が§1.で触れたMartinet, 1962であった。また田中氏が筆者とともに読んでくださった文献は最初が，

Hockett, C. F. 1955. A manual of phonology. Baltimore : Waverly Press. であり，次がPike, K. L. 1947. Phonemics. Ann Arbor : The University of Michigan Press であった。このうちJoos, 1958に含まれている論文の大半は音に関する研究を扱ったものであるから，このようにして筆者が読んだというより，読んでいただいた4冊までは音関係の研究書であると言ってよい。これだけ読んで，まだ音の研究に関心を抱かない人がいたら，その人はよほどおかしい人であることになろう。

ちなみに，筆者は他人が著した文献を読んでいて，いままでに2度目からうろこが落ちた思いを味わったことがある。1度は§1.で述べたMartinet, 1962の中の反構造主義的発言であり，もう1度は上掲のPike, 1947のp.128に出ている「分析の手順Ⅳ－A：ある音を子音と解釈するか，母音と解釈するか。問題 140－カラバ方言DM」を田中氏とともに読んだ時である。それまでは一覧表の10.の論文で筆者はスペイン語音素論では /i/と /u/さえあれば十分で，/y/と /w/とは不要であると主張していたのだが，Pike, 1947の当該部分を読んで目からうろこが落ちる思いを味わい，「音節核音か副音かの作業原則」を思いつき，筆者が1964年にマドリード・コンプルテンセ大学哲文学部に提出したドクター論文「スペイン語音韻論の2大問題：半母音と中和」の半母音の部分でこの思いつきを生かしたのである。それ以後はこのような，一瞬のうちに自分の考えの 180° 転回を味わうことはなくなってしまった。これはひょっとすると，筆者の頭脳の退化を意味するのかもしれない。

第3の理由は，畏友松田　徳一郎氏が1957年4月見事東京大学文学部英文学科の大学院に合格され，中島　文雄氏の講義を聴いての感想を筆者に語ってくれたことによるものである。すなわち松田氏は「やはりブルームフィールドを読まないとダメなんだね」と言われたのである。この発言の中のブルームフィールドは，言わずと知れたBloomfield, L. 1933. Language. New York : Holt. のことである。もちろんこの書物も，松田氏にそう言われて直ちに購入して読んだ。このアメリカ構造主義言語学を代表する名著，その

多くの部分を音の研究が占めている。

第４の理由は，佐藤氏にJoos，1958を読んでいただいていると，そのたびに佐藤氏の恩師服部　四郎先生のことが話題になった。その際筆者が一番困ったのは，服部先生が色々な雑誌に色々な名論文を多数お書きになるので，筆者がそれに目を通したいと思ってもなかなか手に入らないことであった。佐藤氏が東京大学の大学院時代に服部先生の授業で配布された論文のコピーを拝借してコピーしたり，ある場合には筆写したりした。それだけに服部先生の論文集とも言うべき，服部　四郎.1960．言語学の方法．東京：岩波書店．が出版された時は筆者はそれこそ欣喜雀躍したものである。1960年12月26日が同書の発売日であったが，当時住んでいた池袋から17番の数寄屋橋行きの都電に乗り，神保町の交差点の信山社書店の開店時刻10時きっかりに店に入って同書を購入した。定価は 2,000円であるから，当時としては高価な方であったろう。この書物にも，名著「音声学」の著者でもある服部先生のものだけあって，音声・音韻を扱った論文が多数含まれており，筆者は益々音声学・音素論の研究にのめり込んでいった。

この服部，1960よりも１年前のことになるが，太田　朗.1959．米語音素論．東京：研究社．が出版された。この書物の副題は「構造言語学序説」となっていて，当時一世を風靡していたアメリカ構造言語学の中でも最も成功した分野である音素論への絶好の入門書であった。これまた1959年11月30日が発売日であったが，まさにその日に池袋の新栄堂書店で購入した。しかし一度読んだだけでは何のことやらさっぱり分からず，何度も何度も読み返してやっと理解に辿り着いたという記憶がある。のちに1962年９月スペインに留学してマドリード・コンプルテンセ大学哲文学部でドクター論文を書こうと思い立った時，どうしてもこの太田，1959とHockett，1955 に目を通す必要が生じ，両親に頼んではるばる日本から船便で送ってもらった。従って現在も大切に保存している両書はスペインまで長旅を経験し，そのあと筆者の帰国と相前後して日本へ戻ってきたことになる。かような次第で，筆者は他人に，「あなたにとってのバイブルは何ですか」と訊ねられるたびに，

「太田，1959と服部，1960です」と誇らしげに答えることにしている。筆者はこの両書は大変な名著だと思うのだが，残念なことに両書とも絶版になってしまった。しかも太田氏もその後生成文法の方に移ってしまわれ，「否定の意味」という著書で学士院賞を受けられた。めでたいと同時に，非常に残念なことである。とこのように筆者が言う意味は，アメリカ構造言語学の形態論と統語論はなるほどものの見事に破産したけれども，音素論だけは余りにメカニスティックな態度を改めて，適度にメンタリテスィックな行き方をしさえすればこの20世紀末でも立派に通用すると考えているからである。生成文法の一分野として生成音韻論という分野があるが，筆者にとっては余りにも抽象度が高過ぎ，従って余りにも音声的実質を軽視し過ぎるので，賛意を表し難い。

この当時の太田氏は本当にエネルギッシュである。実は本稿では正式には取り上げないけれど，Fries, Charles C.；太田　朗翻訳・解説．1957．外国語としての英語の教授と学習．東京：研究社出版．という業績も出ており，その中の「訳者解説II　構造言語学について」（pp.245－ 266）は少なくとも筆者にとってはとても分かり易く，非常に有益であった。さらに太田，1959の１年後には，太田　朗．1960．構造言語学・テーマと研究（III）．東京：研究社．が出ている。この書は本来英文科の学生で，英語学で卒業論文を書こうとする人々が容易にテーマを見つけられ，しかも必須参考文献探しが楽におこなわれるようにと書かれたものである。しかし筆者のように，スペイン語の音声学・音素論の研究に従事している者にとっても，英語の音素についての自由変異，最小対立，相補的分布，複式相補的分布，同型性等の問題は大いに参考になった。そういう部分だけを参考にしていればよかったのであろうが，ここで筆者の悪い（？）癖が出た。太田，1960の pp.５－８に「§1．2．言語の性質，機能」と題する１節があり，そこで紹介されている「言語とは何ぞや」とか，「音声言語か文字言語か」とか，「God's truthかhocus－pocus か」とかの大きなテーマから解決していこうという気を起こしてしまったのである。一覧表の6.，7.，9．は一応「ス

ペイン語音素論」というタイトルがついているものの，6.は「言語とは何か」を，7.は「God's truth かhocus－pocus か」を，9.は「音声言語の第一次性」と「記号の恣意性」をそれぞれ扱っている。スペイン語音素論の具体的な問題を扱わず，こういう言語学の根本問題を取り上げたことは，筆者の根底から深く掘り下げて考えようとする悪（？）癖が出たものであるが，今となっては無益な回り道をしたとは決して思えなくなってしまった。

2．1．ドクター論文

1962年7月4日筆者は初めて外国旅行に出掛けた。駐日スペイン大使館の留学生試験に合格してのスペイン留学である。出掛ける時はスペインの大学でドクターを取ってやろうなどとは毛頭考えていなかった。ところが元神戸市外語大教授の一色　忠良氏の下宿に転がり込んだところ，折しもそこに海外出張中の角田　理三郎大阪外語大教授が居られ，色々と行動を共にするうちに，同氏は「原さん，ここでは2年くらいで簡単にドクターが取れるそうですよ」とおっしゃった。そう言われてみると，適当にマドリード・コンプルテンセ大学の授業に出ているだけでも退屈だし，何か目標をもってスペインでの生活を送った方がよい，それに日本で大学院へ進んでいないのはやはり筆者の劣等感として残っていたから，それではドクターは取れなくてもよいからとにかくドクター・コースにだけは籍を置いてやろうという気になった。今振り返ってみると，ドクター論文の作成・提出よりもむしろ日本の大学を卒業したことを証明する資格認定，すなわちconvalidación の方が厄介だったように思う。当時スペインの大学は5年制（教養課程2年，専門課程3年）であり，これをアメリカ合衆国の大学の修士課程を終えたのと同等とみなしていた。従って筆者はいずこの大学の修士課程をも終えることなくして学部からいきなり博士課程へと進んだことになる。

ところでドクター論文のネタであるが，§2.でちょっと触れた 10.の論文ではスペイン語音素論に/y，w/は不要であるとの結論を出したことを反省して，Pike，1947にヒントを得た「音節核音か副音かの作業原則」に基づい

て，/y，w/を復活させることを第1のネタとした。第2のネタはTrubetzkoy，1939に出ている中和の概念があまりに幅が広過ぎて，あまりに漠然としていることに気がついて，その適用範囲を思い切って狭めることに求めた。第3のネタは，Quilis，Antonio．1964．La juntura en español：un problema de fonología．PRESENTE Y FUTURO DE LA LENGUA ESPAÑOLA 1．163－171.で内部開放連接がスペイン語に否定されているのにヒントを得て，Stockwell，R，P.，Bowen，J．D．& Silva－Fuenzalida，I．1956．Spanish juncture and intonation LANGUAGE 32．641－665.を徹底的に論駁することに求めた。スペインの大学でドクターを取ったというと，いかにもきこえはよいが，筆者自身はあまり誇りには思っていない。なぜなら当時スペインでは全く知られていなかったアメリカ構造言語学の音素論のメソッドをスペイン語に適用したところ，プラーグ学派の音韻論に近いAlarcos の音韻論とは違う結果が出たに過ぎないからである。1964年6月の口述試験が終わってから10年の歳月が過ぎ，1973年になってこのドクター論文は，Hara，Makoto．1973．Dos principales problemas de fonología española：semivocales y neutralización．Madrid：C．S．I.C.となって出版された。キーリスのおかげである。

筆者は1964年8月に帰国した。直ちにドクター論文を和訳して発表することを思いつき，第1のネタを和訳して17として発表，第2のネタは16となり，第3のネタが20となった。のちにいささか考えが変わって20を改変したのが53である。いま「いささか考えが変わって」と書いたが，筆者のスペイン語音素論はHara，1973の出版以降ほとんど全く変わっていない。これを，筆者のスペイン語音素論は完成品だからと解釈するか，それとも筆者が動脈硬化を起こしているからと解釈するか，筆者としては後者の解釈をとりたいところである。ただ一つ筆者のドクター論文について自画自賛を許してもらうとすれば，そこで筆者が取り上げた半母音にせよ，中和にせよ，アメリカ構造言語学の音素論の代表的な作業原則，すなわち相補的分布や音声的類似が当てはまらぬ世界であり，プラーグ学派の「中心」と「周辺」の概念で言え

ばもちろん「周辺部」を扱ったことになり，その点だけは筆者の目のつけ所はよかったことになる。

また§1.でMartinet，1962を佐藤　純一氏に読んでいただいて，構造主義だけで全てを割り切ろうと思っても無理だと悟ったと書いたが，このように悟ったのがスペイン留学に旅立つ直前であった。この考えの変化がドクター論文にどのように反映しているかを探ってみると，やはり中和を全面否定してしまわなかったところにそれがよく現れていると思う。筆者が中和を唯一認めたケースというのは，ある環境でA音素の実現とB音素の実現とのちょうど中間の音が現れた場合のことで，その実例としては，Robe,　Stanley L. 1960. The Spanish of rural Panama. Berkeley & Los Angeles : The University of California Press. のp.41に，パナマの田舎のスペイン語では音節末において /r/と /l/とのちょうど中間の音が現れるという記述がある。これはやはり中和の一例であると認めざるをえまい。このように 100%の構造主義を認めないとなると，どうしても例外が増えたり，規則が複雑化したりする。まさにそれこそが言語の実態なのである。

2．2．教室での発音指導の産物

教室で学生たちにスペイン語の発音の指導をしていた気がついたことをまとめた論文に，22と76と 121とがある。このうち22はスペイン語の発音は常に音楽で言うレガートでなされねばならないというのがその結論である。日本語にある促音のようなのどを詰める音を極度に嫌い，できるだけアンシェヌマン（音声の連繋）をおこなう，従って語と語との境目がはっきりせず，まさにそれゆえにあのように早口でまくし立てられるのであるというのが筆者の得たスペイン語発音についての知見である。この論文は筆者の書いたものの中ではいささかましな方に属しているのではなかろうかと自負している。17や31とともに一橋大学刊の「一橋論叢」に載せていただいた論文であり，あの頃の一橋大学は非常勤講師の論文までも「一橋論叢」に掲載してくださり，しかも１万円の原稿料まで頂戴したように記憶している。あの国立キャ

ンパスに象徴されるように，実にのびやかで，おおらかな雰囲気が漂っていた。これは国立大学としては実に珍しいことである。

76は日本語や英語の発音の干渉の認められる学生のスペイン語の発音をどう矯正していくかを筆者の教授体験から述べたもの。 121は76を，1990年12月にマドリードでおこなわれた第2回外国語としてのスペイン語教授法学会での口頭発表のためにスペイン語に訳したもの。会議録に載せてもらうため学会終了時に大会組織委に筆者の口頭発表の草稿を手渡してきたのであるが，待てど暮せど会議録は送られてこない。1993年になって編集担当者以外の別の人から手紙が来て，「編集担当者は怠慢でさっぱり編集にとりかかろうとしない。従って私が編集する。しかも悪いことに，編集担当者はあなたの草稿を紛失してしまった。すまぬがもう1度草稿を送ってくれ」とのこと。そういうこともあろうかとコピーをとっておいたので，それを送ったところ，1994年になって会議録と筆者の草稿の抜刷とが送られてきた。スペインという国は本当におもしろい国である。筆者の場合スペインはあばたも笑窪なので，こういうことに腹を立てるどころか，むしろ思わず笑みが漏れてしまうのである。

2．3．　生成音韻論への反撥

生成文法理論では統語部門の中の基底部門の中に語彙部門が存在し，基底部門で語彙挿入がなされる時点では各語彙を形成する音群または音列についての音声学的言及はまったくない。しかし「批評する」という動詞を語彙挿入する場合でも，語彙部門ではcritic，critical，critiqueがより基本的な形であり，criticize やcriticism は前者にvelar softening rule （軟口蓋音軟化規則）を適用することによって派生すると考えるのである。そしてこのような規則の表示は，すべての言語に適用されうる普遍性を尊重して弁別的素性によってなされる。たとえば上の軟口蓋音軟化規則は，Chomsky，N. & Halle，M. 1968. The sound pattern of English. New York，Evanston & London：Harper & Row. の p.224によると，

(114) Velar softening

$$\begin{bmatrix} -\text{cont} \\ -\text{ant} \\ +\text{deriv} \\ <-\text{voice}> \end{bmatrix} \longrightarrow \begin{bmatrix} +\text{cor} \\ +\text{strid} \\ <+\text{ant}> \end{bmatrix} \Big/ __ \begin{bmatrix} -\text{back} \\ -\text{low} \\ -\text{cons} \end{bmatrix}$$

となっている。音素を軽視ないしは無視していることはこれだけでも明々白々である。生成文法の枠組を図示すると，

統語論　⇨　形態論　⇨　弁別的素性

という実に簡単な図式になってしまう。これに対し筆者の創出文法理論は，

統語・文意味論　⇨　形態論　⇨　音素論　⇨　音声学(⇨示差的特徴)
語彙論

と図式化され，相当複雑である。音声学は分析を担当し，音素論は総合を担当するから両者は姉妹関係にあり，いずれか一方が欠けても具合が悪い。また形態素・語彙素は（異）音から成るのではなく，必ず音素から成るのである。Chomsky, N. 1964. Current issues in linguistic theory. The Hague : Mouton.は音素を否定しているかに見えるが，筆者はこれに猛反撥して，1968年8月にメキシコ・シティーで開催された第3回国際イスパニスタス会議で口頭発表したのが27である。

ちなみに生成文法の方で言う弁別的素性，筆者の言葉での示差的特徴を重用することはどうしても各音の実質を無視することになりがちである。その理由は要するに，ある音が他のすべての音から示差的特徴によって区別されればそれで充分とするからである。従って筆者の場合は§2.4.で述べるように，示差的特徴はごく消極的な用い方しかしないことにしている。他から区別されさえすれば，その実質はどうでもよいという考え方は筆者の好むところではない。

77は，上でも紹介したようなVelar　softening の規則を数式のような形で提示する手法に対して疑問を呈した論文である。かりに百歩譲って数式は分

かり易いとしても，その上に生成文法家の言う弁別的素性を用いるとなるとよほどそういう表記に慣れた人ではないと，その数式が何を表しているのかさっぱり分からないことになる。これを，規則を表現することば（これをメタ言語と呼ぶ）によって表現した方が，学問的厳密性がいささか失われるにしても，一目瞭然であって理解が容易なのではないかというのがこの論文における筆者の主張である。そもそも自然科学的厳密さのシンボルとも言える数式を，曖昧な部分をいささか抱えているところの，人文科学的な，人間的な暖か味を持った，例外を多く含んだ言語の規則に適用するのが間違いなのではなかろうか。上掲の（ 114）Velar softening の規則も，筆者なら「後寄りの調音点を有する軟口蓋・破裂音は，前寄りの母音の前では前寄り音への同化作用を起こして歯茎または硬口蓋の歯擦音になる」と表現したいところである。このメタ言語の重視は，筆者の提唱している創出文法理論の文意味部門では特に有効である。筆者の文法理論では，生成文法理論と違って，文意味部門が真の意味でのインプットとなる。そしてある場合には文意味部門がより深いB階層と，より浅いA階層に二分されることすらある。ことほどさように，統語部門に比して文意味部門が重要な役割を果しているのである。たとえばスペイン語民はよく「だれも知らない」という意味で¡Quién sabe！という表現を用いる。この表現の文字どおりの意味は「だれが知るものか」ということで，要するに反語文なのである。そこで筆者は文意味部門のB階層に「だれも知らない」とメタ言語で置き，針山図は書かない。そして統語形式に近い意味を表すA階層では針山図を書き，針山の中に入る「運動」は「知識」，主格は「だれが」とする。もしこの文に「軽悔」の意味が感じられるとすれば，文意味修飾要素として針山の麓に置く。

§2.1.で述べたように，筆者はドクター論文で中和の適用範囲を著しく制限した。となるとたとえば submarino （潜水艦）のｂの部分に，日常語ではあとに来ているｍへの同化が起こってｂがｍになるという現象が起こる。これをHara， 1973や16ではｂとｍとを縦に並べていささか苦しい音素表記をしているが，これなどメタ言語を用いれば，音素表記の上では /submarino/

とした上で，「このbの部分には日常語では後続のmへの同化が起こって音素nが起こることがある」としておけばよい。音声としては［m］であるが，筆者の理論では音素としては /n/である。また筆者が中和の適用を是とした唯一のケースもメタ言語によってうまく解決できる。例をRobe, 1960の中の，carne （肉）にとると，このrの部分にrとlとのちょうど中間の音が現れるのがパナマの田舎のスペイン語であり，このケースを筆者は筆者の認める唯一の中和のケースとするのであるが， Hara, 1973や16ではrという活字とlという活字とを重ね合わせた音声記号をこの音に充てていた。しかし現今での筆者の考えでは，音素表記では /karne/としておき，メタ言語によって，「パナマの田舎のスペイン語では音節末に流音が現れる場合rとlとのちょうど中間の音が現れる」としておく。

2．4．音声学

筆者には音素論関係の業績は比較的多いのだが，純音声学関係の論文は少ない。だからといって音声学を軽視していると解されては困る。たしかに筆者はメカには弱い方であるが，筆者の音素論は常に確固とした音声学的基盤に根ざしているつもりである。そうでなければ自信をもって学生のスペイン語の発音を矯正することなどできはしない。その数少ない音声学関係の論文の中で筆者が好きなのは31である。これはもともと関西外国語大学で開催された日本言語学会で口頭発表したものであるが，少し分量が多過ぎて早口でしゃべり過ぎたため評判はよくなかった。しかし一橋論叢に論文の形で載せてもらってから読み返してみると，我ながらなかなか良いことを言っていると思うようになった。すなわちスペイン語の無声歯間音はstridentであり，英語のそれ（thで表される）はmellowであるとか，従ってスペイン語の有声歯間音はstridentであるのに対し，英語のそれは［δ］で表されるべきmellowな音であるとか，スペイン語独自の音声現象であるレイラミエントは示差的特徴で表す（本稿§2.3.を参照のこと）と， stridentとvoiced の複合体であること等々。もう一つの論文 102は，口蓋音化は果して軟音化な

のかという疑問を呈し，もろもろの言語に当たった上で，口蓋音化は硬音化でももちろんないが，軟音化でもないという結論を出した。

2．5．100％構造主義への疑問

このテーマについてはすでに§1.のMartinet，1962を読んで目からうろこが落ちたことを述べた箇所で触れた。37は音体系には必ずと言ってよいほど割り切れない部分があるから，構造主義はそういう割り切れない部分を認めない限り本物でないことを述べたもの。71は音声学，音素論，通時音韻論，方言学，ロマンス語学の5分野についてそれぞれ割り切れない部分を指摘したもの。83はスペイン語の中の半母音音素として，/y/ とペアを組むものとして /w/を認めた上で，さらにhuevo （卵）の発音に，他に güevo やbuevo があることにヒントを得て，子音体系の中のｂとｇとの脇にそれぞれｗを割り込ませるという，実に非構造主義的な主張を展開した。これはもともと流音音素と軟口蓋鼻子音とが整然とした子音体系の中に根づきにくいことから考えついたものである。

2．6．コセリウのnorma （言語慣用）批判

筆者はかねがね翻訳をやらないことを自分の信念としてきた。その理由はどうせ文章を書くのなら，たとえ拙くとも，自分の文章を書きたい，他人の文があるとどうしてもそれに影響されて自分の文体が崩れてしまうのではないかと危惧するからである。それに日本ではある原作を翻訳すると，訳者は原作者の考えを支持しているというふうにとられがちだからである。しかし語学分野でスペイン語からの翻訳というのは大変珍しいし，また勤勉なことこの上なく，また仕事の早いことこの上ない共訳者として上田　博人氏を得たので，思わずコセリウの翻訳に手を出してしまった。その代わり，翻訳をしたけれども，決してコセリウの考えは支持していないぞということを明らかにするために，「訳者解説」で徹底的に批判してしまった。つまりコセリウという人は反ソシュール感情が強く，ラングとパロールという二分法をと

らずに，体系と言語慣用と話という三分法をとった。しかし筆者に言わせれば，音に例をとれば、体系は音素に，言語慣用は異音に，話は音にそれぞれ該当するものであり，異音と音の違いは，音素と異音・音との違いのレヴェルより一段低いレヴェルに属するものであるから，やはりソシュールの二分法でよい，やはりソシュールの二分法はコロンブスの卵であるという結論を出した。コセリウを翻訳して筆者が得た最大の教訓は，「真の言語学者とはある一つの言語について真に言語学的な文法を書いた人のことである」ということであった。

3．通時音韻論

§2.で述べたように，現南山大学教授の田中　春美氏は，筆者にHockett，1955 とPike，1947とを読んでくださっていた時，ふと「原さん，私は通時音韻論がおもしろくて仕方がないのだが，あなたは？」とお訊ねになった。その頃共時的研究一点張りであった筆者はこの質問に対して否定的なお答えをした。しかし筆者の考えが完全にくつがえったのは1962年からのスペイン留学のおかげである。筆者はマドリード・コンプルテンセ大学の哲文学部の博士課程に入学したが，学部の5年生の授業を一つ聴いた。それがLapesa教授担当の「スペイン語方言学」であった。この講義を聴いて筆者が感じたことは，アラビヤ語源の語その他を除くと，スペイン語のどんな方言のどんな語もすべて俗ラテン語にその源を発しているということであって，方言学が否応なしに通時態を前提とすることを知った。そこで慌ててAlarcos, Emilio. 1954. Fonología española[2]. Madrid：Gredos.の通時音韻論の部分を読んだりしているうちに，否応なしに言語の通時的研究に興味を抱いてしまった。それが発端となってスペインから帰国後通時音韻論関係の論文も書くようになった。21は1966年大学院が発足して最初の年にスペイン語歯擦音の歴史的変遷を扱った論文を多数読んだ結果をまとめたものである。23と25とはAlonso，Dámaso. 1962. La fragmentación fonética peninsular. Madrid：C. S. I. C. の書評である。この書評をして感じたこ

とは，通時論はたしかにおもしろいのだが，過去のことを扱うがゆえに昔の音変化のことは全部は分からないということである。28は愛知学院大学で開催された日本言語学会でおこなった口頭発表をのちに「言語研究」に載せるべく文章化したものである。この論文ではスペイン語音変化を扱わずに，むしろ俗ラテン語からスペイン語にかけての音の上での不変化の要因をとりあげたもので，あとになって考えてみると，サピアのdrift （駆流）について扱っていたように思う。このように日本言語学会などに他流試合を挑んだことは，よく煮えた湯を飲まされたりして非常に有益であった。このようにして筆者は井の中の蛙にならずに済んだのである。32は伊藤　太吾氏の通時音韻論を批判したものであるが，今になってみると若気の過ちでしかない。51はスペイン語の最古文献を紹介しただけのもので，日本ロマンス語学会の大会での統一テーマのためにスペイン語界を代表して「サン・ミリャンの注記」の一部を注釈したもの。筆者にとってはつまらない業績である。87はスペイン国カセレス市で開催された第１回国際スペイン語史学会で口頭発表したものがのちに会議録に載ったもの。中世において硬口蓋・側面音はｙを経ずしていきなり硬口蓋の有声歯擦音に変化したと想定した。筆者にしてはいささか自信のある方の業績かもしれない。82と87と93とは，通時音韻論の限界と展望を論じたもの。通時音韻の限界とは，さきほど23と25を扱った所で述べたとおり，通時音韻論が過去のことを扱うがゆえに昔の音変化のことは全部は絶対に分からないという点にある。同じく展望の方は，通時音韻論の手法により過去を振り返り，かつ方言学の手法によって現在のスペイン語の状況を知ると，もちろんある程度までであるが，スペイン語の未来が予測できるというものである。さらに 104はスペイン語音変化史全体について筆者なりの見直しをおこない，ある場合にはバスク語基層説を前面に出す必要もあることを述べた論文。 113はさきほどの通時音韻論の展望をスペイン語に直して，1990年バルセローナでおこなわれた第10回国際イスパスタ会議で発表したもの。最後に 117は，言語に良い意味での進歩・発展はありうるかという問に答えたもの。スペイン語に関する限り，音韻論と形態論に関しては進歩・

発展はないが，統語論については近世初頭から現代にかけての変化を見ていると，それはたしかにあるという結論になった。このように筆者の書くものは分野分野によってあい異なる解釈をとるようになってきている。態度が首尾一貫していないという非難は先刻承知の上。筆者が段々と言語の複雑性に目覚めてきたのだというふうに解釈していただけないものであろうか。

4．方言学

§3.もそうであったが，筆者がスペインへ留学して最も成果が挙がったと思っているのはスペインの伝統的フィロロジーを知ったことである。今ではリングイスティックスよりもむしろフィロロジーの方が筆者にとって魅力的なものとなってしまったことは，すでに原　誠．1994．言語学的根本態度決定のためのもろもろの選択肢（その7）——リングイスティックスかフィロロジーか——「アジア・アフリカ文法研究」23.1－25．で述べた。このスペインの伝統的フィロロジーを知ったおかげで，言語研究の通時的側面や方言学に興味が出てき，筆者のスペイン語教師としての幅は大いに広がったということができる。ただし筆者の場合言語研究の通時的側面といっても決して純フィロロジカルに研究するわけではなく，そこにリングイスティックな見方を加えるからこそ筆者なりのスペイン語通時音韻論が成立したのである。また筆者が方言学に興味をもったのはもちろんLapesa教授の「スペイン語方言学」に出席したこともあるが，1962年当時日本では目を通すことのできなかったMalmberg，Bertil．1949．La structure syllabique de l'espagnol．BOLETIM DE FILOLOGIA 9．99－120．を読んだことも大きかった。Malmberg　はこの論文の中でスペイン語圏全体を見渡すと，閉音節末尾の子音の弱化に伴う開音節化への傾向を看取できるという素晴らしい大発見を披露している。この論文に大感激した筆者はそれ以後言語の中に潜んでいるある一定方向への潮流（drift ）をグローバルに捉えるように心掛けるようになった。この志向がいくらかでも実を結んだのが，24，45，79，80，84，89を集大成した原，1995である。この書物については本稿の§1.の末尾です

でに述べた。なるほどMalmbergの発見は素晴らしいものであるが，メキシコ・シティーの一部や中米に現れ始めた子音の強化と母音の弱化・消失現象を彼の説ではうまく説明できない。これに反して筆者が原，1995の中で主張している「たるみと張り」説によればその説明は何らむずかしいものではない。「たるみと張り」説とは，中南米のスペイン語とアンダルシーア方言とを総称した南のスペイン語は余計なエネルギーを費消しないたるみをその特徴としており，カスティーヤ方言に代表される北のスペイン語は余計なエネルギーを費消する張りをその特徴としているから，いずれは前者が後者を圧倒するであろうというものである。

5．ロマンス語学

筆者はスペイン留学の2年目にDámaso　Alonso教授の「ロマンス語学」の授業にも出席し，ロマンス語学にも興味を抱いた。しかしこの分野は，のちに興味を抱いたことを悔いるほどの難物であった。つまりこれは筆者の力量のせいであるのだが，この分野は筆者の能力ではまったく体系化が不可能なのである。これを「二つのジレンマ」の形で表現したのが49であり，これはロマンス語学に対する筆者の敗北宣言である。この敗北宣言は，原　誠．近刊．ロマンス諸語音変化の説明におけるアドホックネスについて「ロマンス語研究」29．でもおこなっている。従って30や97のように，ロマンス語学というより高次の次元に立たず，スペイン語の音変化だけについて大きな顔をしてものを言っていた方がむしろよかったのである。30はLausberg，Heinrich．1965．Lingüística románica 1．Madrid：Gredos．の中のスペイン語を扱った部分のみについての書評である。これを大阪大学教養部で開催された日本ロマンス語学会の大会で口頭発表し，Lausbergがスペイン語音について述べている誤りを徹底的に批判した。「原という奴は何と傲慢な男だ」と聴衆に思われたらしく，大変評判が悪かった。97はDeferrari，Harry A．1954．The phonology of Italian，Spanish，and French．Washington D.C．の，スペイン語音の変化の部分のみについての書評であるが，過去の

音変化についての彼のカテゴリカルに割り切る説明ぶりとその天真爛漫さに筆者の方があっけにとられてしまった。とにかく未だにロマンス語学は筆者にとって苦手中の苦手である。

6．啓蒙的なもの

この「スペイン語学のすすめ」シリーズはもともと（株）文流がスペイン語学の文献を文流刊の「南欧文化」で読者のために紹介してくれとの依頼で始まったものであったが，我田引水をやる筆者の悪癖が出て，スペイン語学の各分野についての問題点の紹介と筆者の関係論文の提示だけで終わってしまった。音関係のすすめは39と41と47の３点であるが，筆者の快心作とは言えないのでここであまり多くを語りたくない。

7．いわゆる‘かぶせ音素’について

本章の標題に「いわゆる」をつけたのは，原　誠．1993．言語学的根本態度決定のためのもろもろの選択肢（その３）－メンタリズムかメカニズムか－「東京外国語大学論集」47．49－72．のp.53において，「かぶせ音素」という言葉は一切使わないことにしてしまったと述べているからである。それかあらぬかこのテーマに関する限り筆者の業績は１点もない。しかしそれを補うかのように，筆者の担当していた「スペイン語学概論」の中の「音声学」の部門でQuilis，Antonio．1971．Caraterización fonética del acento español TRAVAUX DE LINGUISTIQUE ET DE LITTERATURE 9．53－72．を取り上げたことがあったが，これに刺激を受けた川上　茂信や木村琢也がスペイン語のストレスの音声学的実態について実り多き研究をおこなっている。彼ら二人はQuilisとともにスペイン語のストレスの実体は強さよりも高さの方がより関与的という考えに傾いている。イントネーションについてももちろん筆者の業績は１点もない。しかしReal Academia Es pañola．1973．Esbozo de una nueva gramática de la lengua española．Madrid：Espasa-Calpe．のpp.102－119.において用いられている上つき数字1，2，3 に

よる表記法はスペイン語のイントネーションの実体をうまく表すことができないので，筆者は採用しない。その代わり原　誠．1979．スペイン語入門．東京：岩波書店．では，Navarro, Tomás. 1959. Manual de pronunciación española. Madrid：C.S.I.C. の中で用いられている，各呼気段落の末尾ごとに「低，高，中低，中高，水平」のいずれかを表記する方法を採用している。分節音素といわゆる‘かぶせ音素’とではその音韻論的関与性において格段の差があるのである。

8．国際学会への挑戦

スペイン語の音について国際学会で研究発表し，それがのちに会議録に載ったケースは5回あり，それが27と86と 107と 113と 121である。初めのうちこそ日本人のイスパニスタがスペイン語について研究発表するということで大変珍しがられ，従って甘い点をつけてくれたが，最近ではスペイン語の原語民でもないのに，そんな奴にスペイン語のことが何が分かるかといった態度に接することが多くなり，また我々日本人も彼らのライヴァルまたは強敵と思われるようになってきた。それだけ日本のスペイン語学のレヴェルが上がったということである。それにつけてもこういった国際研究集会で研究発表をするから旅費と滞在費とを出してくれと文部省に請求するたびに，同省はほとんど毎回費用を出してくれた。大変ありがたいことである。しかし学会開始直前に現地に着き，終わったら直ちに帰国せねばならないのには正直言って閉口した。これでは良いコンディションで良い発表は望み薄である。時差ボケがとれないからである。筆者も段々年を取るにつれて，短期の外国旅行が苦痛になってきた。それにもう研究発表のネタも尽きてきたことだし，この辺で国際研究集会に出席して研究発表をすることは打止めにしようと思う。数多くの知人に会えなくなるのは大変苦痛であるが。

9．スペイン語学概論の初めの5項目と対照分析

筆者は東京外国語大学で3・4年生用の「スペイン語学概論」を25年にわ

たって担当してきた。これはまったく自慢にならない。むしろ黄色くなった講義ノートを毎年読み上げてマンネリ的授業で誤魔化していたのだろうと痛くもない腹を探られるのが関の山である。そこでマンネリ授業だけはぜひ避けようと思って，語学概論を構成する10項目の各々についてできるだけ毎年違う内容で講義するようにした。とくに初めの５項目，すなわち音声学，音素論，通時音韻論，方言学，ロマンス語学，それに第10番目の対照分析は本稿のテーマに関係の深い分野であるが，なるべく複数の筆者の論文を年ごとに変えそのコピーを聴講者に配布して脱線を交えながら講義するようにした。すなわち音声学では22と31と84とを１年ずつ交替で用いる，音素論でも16と17と20と83とを１年ずつ交替でもちいる，通時音韻論でも82と93と 113とを１年ずつ交替で用いる，方言学でも89と 107とを１年ずつ交替で用いる，ロマンス語学でも49とロマンス語の形態論に関する論文（原　誠．1988．ロマンス諸語に見られる俗ラテン語動詞の単純化「アジア・アフリカ文法研究」17.1－31．）とを１年ずつ交替で用いる，また対照分析でも，音声学で22を用いない場合の22と28とスペイン語統語論に関する論文（原　誠．1984．スペイン語創出文法理論が究極的に目指すもの「アジア・アフリカ文法研究」13.15－30．）とを１年ずつ交替で用いる　という作戦をとった。それはともかく，自己の書いた論文のコピーを学生に配布してそれに基づいて脱線を交えながら，そして適当に学生を指名しながら講義を進めるというのは実に楽しいし，また大変楽である。1970年宮城　昇教授から「スペイン語学概論」を引継いだ頃は，講義の前日はほとんど徹夜でノート作りをしていたのがかえって懐かしく感じられるくらいである。くだらない論文でも数多く書いているとこういうメリットも出てくるのである。

10．結びに代えて

本稿の性質上とくに結論などというものはない。ただ40歳になるまで音の研究をやろうと思い立ち，曲がりなりにもそれを実行してきたことにこの上ない満足を覚えている。千野　栄一氏が半ばふざけてではあったが，よく

「言語の研究はまず音声から始めなければならない。その意味で言語の研究を意味論や文体論から始める奴はバカだ」と言っておられたが，まじめな話，これは至言であると思う。早い話が，筆者の場合，自信をもって学生たちのスペイン語の発音を直すことができる。もっともこれには拙宅の近所にある相田歯科医院の相田　俊孝先生の，歯の健康についての熱心なご指導が与ってあまりあるものがあるが。おかげで筆者は上の前歯2本が継ぎ歯であるだけで，あとは全部自分の歯であるから，学生たちの発音の指導にも比較的自信をもって当たることができる。入れ歯になったら学生たちのスペイン語の発音の指導は遠慮すべしというのが筆者の信念である。それに現在の日本のスペイン語教育の状況には，筆者のような日本人の教師までが発音の指導にしゃしゃり出ねばならない事情が，残念ながら，あると思う。その一は日本人にとってスペイン語の発音はやさしいと思われていることである。たしかにそういう面はあるが，油断大敵，微妙な所でスペイン語の発音と日本語の発音とはくい違っているのである。スペイン語の教師も学生もこの点を甘く考えている人が多い。その二は現在日本の大学でスペイン語を教えているネイティヴの先生方がスペイン語音声学の知識がないので，日本人学生たちに責任をもったスペイン語発音の指導ができないことである。日本人が日本の内外で日本語を教えるのが大変なことであるのと同様に，スペイン語の原語民にとっても日本でスペイン語を学生たちに教えることは実に大変なことであることをよく自覚してもらいたいものだ。

§2.3.で提示した創出文法理論の枠組は，最左端の「文意味部門」がインプットとなって，最右端のストレス・イントネーションつきの実際の音声まで達さねばならない。その中間には左から右に統語形式，語彙素，形態素，音素のレヴェルが介在している。その意味でも音の研究に親しんだことは誤りではなかったと筆者は思っている。

これを要するに，スペイン語音の研究は筆者をして，言語学が科学的であるためにはどんな要件が必要とされるか，言語学における構造主義とは何か，合理論か経験論かの問題，これはだいたいにおいて演繹か帰納かの問題に等

しくなるのだが，こういった問題を考えさせてくれたのである。さらにこれを大げさに表現するならば，音声の研究は筆者をして，言語学とは何か，自然科学と対立する意味での人文科学とは何か，ひいては学問とは何かを考えさせてくれたのである。

原　スペイン語音関係論文一覧表

3. 中南米のスペイン語（その１）－中南米スペイン語におけるsubstratumに関して－「イスパニカ」４～5.10－18（1959）
5. 中南米のスペイン語（その２）－中南米スペイン語とアンダルシーア方言との関係－「中南米経済研究」 5.101－111（1960）
6. スペイン語音素論（その１）－言語について－「耕文」 10.39－52（1961）
7. スペイン語音素論（その３）－言語構造は発見するものか組み立てるものか－「スペイン図書」5.12－27（1961）
8. 中南米のスペイン語（その３）－yeísmo－「イスパニカ」6.26－40（1961）
9. スペイン語音素論（その２）－（その１への注）－「耕文」 11.11－23（1961）
10. スペイン語音素論（その４）－スペイン語に/y，w/を認めることの当否について－「東京外国語大学論集」9.47－68（1961）
12. スペイン語音素論（その６）＆中南米のスペイン語（その５）－中南米のスペイン語に特徴的な諸音声現象を音素論的に解釈する場合に生ずる技術的問題点－「耕文」12.1－22（1964）
14. 中南米のスペイン語（その４）－中南米のスペイン語（その１）に対する補足－「イスパニカ」 10.27－36（1965）
16. スペイン語音素論（その７）－中和批判－「東京外国語大学論集」

13.37－76(1966)

17. スペイン語音素論（その５）－スペイン語のいわゆる半母音の音素論的解釈についての再考－「一橋論叢」56.154－ 174（1966）

18. 中南米のスペイン語（その６）－中南米のスペイン語（その３）への補足－「イスパニカ」 11.42－57（1966）

20. スペイン語音素論（その８）－スペイン語に内部開放連接は存在するか?－「東京外国語大学論集」15.101－ 130（1967）

21. 近世におけるスペイン語歯擦音素の変遷について「ロマンス語研究」1.15－22（1967）

22. スペイン語音素論（その９）－スペイン語発話の音声学的－大特徴－「一橋論叢」 59.50－67（1968）

23. イベリヤ半島における俗ラテン語の音声分化（上）「ロマンス語研究」3.21－32 & 43（1968）

24. 中南米スペイン語（その７）－メキシコ・シティーのスペイン語－「イスパニカ」 14.20－35（1969）

25. イベリヤ半島における俗ラテン語の音声分化（下）「東京外国語大学論集」20.1－10（1970）

27. En defensa del concepto “fonema” contra la fonología generativa de la escuela de Chomsky ACTAS DEL TERCER CONGRESO INTERNACIONAL DE HISPANISTAS 435－442（1970）

28. スペイン語通時音韻論の一傾向「言語研究」 58.20－38（1971）

29. 中南米のスペイン語（その８）－G. Salvador の論文「アンダルシーア方言音声学とその社会的・地理的拡散」にちなんで－「イスパニカ」17.37－51（1973）

30. ロマンス諸語比較研究とスペイン語通時言語学とのくいちがい「東京外国語大学論集」23.1－18（1974）

31. スペイン語のレイラミエントの音声的実体「一橋論叢」73.197－214（1975）

32. スペイン語通時音韻論の諸問題「ロマンス語研究」8～ 9.5－23（1974・75）
37. 言語学における構造主義「ロマンス語研究」 10.22－39（1976）
39. スペイン語学のすすめ（3）－スペイン語音声学－「南欧文化」4.83－91（1977）
41. スペイン語学のすすめ（4）－スペイン語音素論－「南欧文化」 5.143－152（1978）
45. 中南米のスペイン語（その9）－スペイン語の均一化と方言分化－「東京外国語大学論集」 30.19－39（1980）
47. スペイン語学のすすめ（5）－スペイン語通時音韻論－「南欧文化」 6.130－140（1980）
49. ロマンス語学における二つのジレンマ「東京外国語大学論集」31.1－30（1981）
50. コセリウ言語学撰集　2　言語体系の訳者解説　212－239（1981）
51. スペイン語の最古文献「ロマンス語研究」13～14.117－125（1981）
53. 中南米のスペイン語（その10）－Hara，1973の部分的修正－「イスパニカ」 25.16－38（1981）
71. 言語の体系性と非体系性について（上）「東京外国語大学論集」 34.29－49（1984）
76. 日本人学生にスペイン語発音を指導する際の技術的問題点AVEC Annual Report 1.23－37（1985）
77. メタ言語讃「イスパニカ」29.1－26（1985）
79. 中南米のスペイン語（その11）－スペイン語の方言分化再考－「東京外国語大学論集」 36.15－32（1986）
80. 中南米のスペイン語（その12）－たるみと張り説再考－「イスパニカ」30.31－49（1986）
82. スペイン語通時音韻論の二大問題（上）「東京外国語大学論集」37.1－25（1987）

83. スペイン語子音体系内への音素 /w/の位置付け「スペイン語学研究」2.1－21 (1987)
84. 中南米のスペイン語（その13）－スペイン語における緊張性音と弛緩性音との対立の相対性について－「イスパニカ」31.1－16 (1987)
86. Una consideración fonológica diacrónica sobre la palatalización en castellano de algunos grupos consonánticos latinos ACTAS DEL PRIMER CONGRESO INTERNACIONAL DE HISTORIA DE LA LENGUA ESPAÑOLA 1.121－126 (1988)
87. スペイン語通時音韻論の二大問題（中）－通時音韻論の限界と展望－「東京外国語大学論集」 38.35－58 (1988)
89. 中南米のスペイン語（その14）－中南米のスペイン語におけるたるみと張り説再々考－「イスパニカ」 32.43－61 (1988)
93. スペイン語通時音韻論の二大問題（下）－通時音韻論の展望－「東京外国語大学論集」 39.73－106 (1989)
97. Deferrari のロマンス諸語通時音声学について「ロマンス語研究」23.3－15 (1990)
102. スペイン語の子音における口蓋音化「ロマンス語研究」24.155－166 (1991)
104. スペイン語音変化の原因についての再検討「スペイン語学研究」6.35－55 (1991)
107. Una interpretación cronológica de la distribución fonética de lo tenso y lo relajado del español de América EL ESPAÑOL DE AMÉRICA 1.405－410 (1991)
113. Una perspectiva de fonología diacrónica española ACTAS DEL X CONGRESO INTERNACIONAL DE HISPANISTAS 4.1191－1200 (1992)
117. ¿Es que evoluciona el español? ACTAS DEL TERCER CONGRESO ASIÁTICO DE HISPANISTAS 114－118 (1993)

121. Método de enseñanza de la pronunciación española a los alumnos japoneses ACTAS DEL SEGUNDO CONGRESO NACIONAL DE ASELE 371－379 (1994)

［番号がとびとびになっているのは，原の全業績の中からスペイン語音関係のものだけを拾い上げたからである］